

会員の広場



有意義だった「緑陰論争」

深瀬 拓（東京）

風薫る5月18日、物申す会は「緑陰論争」と銘打って34回にして初めて屋外へ飛び出した。幸い晴天に恵まれ、千鳥ヶ淵戦没者墓苑を参拝後、墓苑の会議室で例会に移った。当日のテーマ「日本の戦前、戦中、戦後、そして現在」を考慮しての場所の選択でもあった。議論のスタートから質問が相次いだ。まず何ををもって戦前とするのか、と。常識的には太平洋戦争以前と

なるが、そのどこから議論を始めるかで意見百出。満州事変、満州国建国をほぼスタートラインに強引にさせていただいた。日本が資源確保と称して中国大陸に足を踏み入れ、以後ノーリタインの泥沼にはまりこんだ歴史をたどってきたからだ。

時代背景は、列強諸国が帝国主義を競う時代から、民族自決、民主主義の時代へと、世界の潮流は変化し始めた。日本は遅れてきた帝国主義ともいわれるように、世界の潮流の変化を読み切れないまま国際連盟からの脱退へと進む。国内には、世論の熱狂と「決められない政治」があったようだ。

太平洋戦争と呼ぶのか、それとも大東亜戦争か。日中戦争か支那事変か、など、呼称と概念規定をはっきりさせないと議論がかみ合わず進まないとの指摘もされた。大東亜共栄圏ははたして理想を追求する旗印なのか、それとも欺瞞に満ちたスローガンだったかと、さらに論点提起が相次ぐ。しかし、議論を進めるうち

にいろいろな側面に触れることができるようになり、徐々に参加者一同が共通の認識のもとに理解し合える雰囲気が出てきた。

政治の世界に目を集中させると、コロコロと変わっていったのが現実だった。戦前は内閣不一致で簡単に内閣は瓦解した。仕切り直しすることに、戦争へ戦争へと近付いていく。極端な言い方をすれば、陸軍大臣、海軍大臣は軍の意にそぐわなくなると内閣不一致に追い込む。戦争準備の時間稼ぎが必要となれば、内閣の瓦解を恐れて、異論を唱えなかったという。まさに「決められない政治」が繰り返された。

敗戦から現在までを見ても、この傾向は変わっていない。「決められない政治」がキーワードになってきたが、ではその原因は何か。それはリーダー不在ではないか。そのリーダーを選ぶのは誰か。「自明の結論」のところまで話は進んだ。

須山会員から決定的な発言があった。日本民族はす

ばらしい、と思うが、哲学が貧困。個人の自立がなく、自分の頭でよく考えない、権威主義になびき、人気の方向にワ〜といってしまう。よく考えてほしい、と。上田会員からは、東京裁判におけるパール判事の見解の紹介があった。パール判事の指摘する事実誤認、無効性について、参加者はあらためて認識を深めた。

会員のそのほかの発言では、「もしも日本が勝っていたら、軍人が威張っている社会ができていただろう。そんな日本には住みたくない」、根本的なことでは、「今の尺度で歴史を見てはならない」、「マスコミ（新聞報道やニュース映画）も舞い上がったのではなかったか」、「日本人は世界的視野が欠けている」などがあった。さらに海軍善玉説、反対に悪玉論、教育の必要性、明治憲法と統帥権、天皇責任論や終戦時の天皇退位論など、多岐にわたった。

有志7名が近くの台湾料理店で二次会を開き、体験談などに花が咲いて、楽しいひと時を過ごした。